死体が腐り、稲の実や植物の種子が腐り、長雨による被害は広がるいっぽうで、食中毒は、毎日のように新聞を賑わしている。もううんざりだ。そして、もう死滅したと思われていたコレラが、息を吹きかえすように、中部地方の港町で発生した。人々は、水を畏れた。まだ、降り続く雨をとめる力は、科学にはなかった。コンピューターが唸り声をあげている時代にしては、何も解決できぬ科学だと人々の非難が集中した。子供たちは、学校で作ったてるてる坊主を持ち帰って、それぞれの家の軒に吊るした。街には、無数のてるてる坊主が雨に濡れ、風に揺れる光景が点在した。

X氏は、今日も、湿気を含んで重くなった紺の背広を着て、濡れてカビの匂いを放っている靴をはき、いつもの坂道をのぼって、会社に出かけるのだった。

長雨のなかで時間は滑るように過ぎていった。いつもの打ち合わせ、レポートの整理、昼食、レセプトの点検、あたらしいことは何もない。歯車の回転は実に正確だ。左手の調子も戻ってきた。復活だ。指の感触は狂いもなく心の水準器となっている。

夕方、肩越しに女の声が飛んできた。

——もうお帰りなの

X氏の耳はその声を忘れてはいなかった。白い制服を脱いだためか、身体にも眼にもあの鋭い気配はなく、3〜4歳若返ったかと思われる女が、大きな黒い眼と真紅の唇で微笑っていた。昨夜、中空に浮かんでいたあの唇が、X氏の眼の前に、今、在る。もちろん、幻影ではない。虫が知らせ

たのかもしれない。

——今日も湿気がひどいね

——不快指数はあがりっぱなしだもの

——いつまで続くか

肩を並べて歩きはじめていた。

——もう手の傷、なんともないでしょう?

——平気みたいですね

——人の手を噛むおかしな犬

——おかしくなるね、この雨じゃあ

——遅すぎたけど、快気祝いってどう?

——一杯、御馳走させて下さい

肩と肩の間に垂直に雨が降っている。X氏は、自分のリズムと歩幅で駅の雑踏を歩き、細く入りくんだ路地の、赤い提灯がゆれる一角に女を誘った。焼鳥の煙が店先に流れ、男たちが気楽に立ち寄れる店が並んでいた。どこにでもいる平凡な男たちが群れ集う場所だった。

X氏は、客が14〜15人も坐れば満員になるカウンターだけの、小さな店に入っていった。

——よくいらっしゃるみたいね